子二十五人。』とある。今の手取川であるが、流域は同じくない。

ヒラカゲアキラ 比良景彰 通稱莊五郎・左内。天明七年幼少で父宗右衛門の祿三の一を襲ぎ、寛政元年本知百八十石に復し、御馬廻に列し、前田齊泰御抱守より次第に昇進して先箇頭に至り、天保七年百石を加へ、同年七月廿六日六十二歳を以て歿した。

ヒラカゲチカ 比良景鄰 通稱唯右衛門。享保十年父津太夫の遺知百五十石を襲ぎ、改作奉行に任じ、寶曆四年三十石を加へ、明和六年九月十六日四十九歳を以て歿した。

ビラガハ 比良川 鳳至郡に在つて、一に住吉川ともいふ。その上流は、伊久留領に發する伊久留川で、沖名古川を併せ、比良領で比良灣に注ぐ。流程六粁許。

ヒラカミナト 比樂湊 主税式諸國運ニ漕雜物一功賃の條に、『越前國海路。自ニ比樂湊一漕ニ敦賀津一船賃云々。』とある。比樂湊は比樂河の河口港であつた。

ヒラギ 平木 石川郡山島郷に屬する部落。

ヒラグリ 平栗 石川郡富樫庄に屬する部落。

ヒラサハ 平澤 蔭涼軒日錄寛正三年十二月十九日に、『加賀國平澤瑞雲庵盜賊之事伺之、云々。蓋富樫次郎被管之事也。』とある。平澤は今の石川郡大平澤・小平澤であらう。

ヒラサハイシ 平澤石 ヒラッ—— 石川郡小平澤から産する石材。安山岩質凝灰岩で、帶灰黝色石基中に、濃草色なる角閃石様物質の斑紋があり、質極めて硬い。

ヒラサハガハ 平澤川 ヒラッ—— 石川郡國見山の西麓尾谷より出で、大平澤・小平澤を經、山川の南に於いて內川に合し、遂に犀川に注ぐ。

ヒラサハガハ 平澤川 ヒラッ—— 羽咋郡大笹領いの谷から流出、同領で米町川に流合ふ。流程二粁八許。

ヒラサハブン 平澤分 鹿島郡深見の內の小字。

ヒラシマ 平島 珠洲郡鹿泊部落の沖に在る島。

ヒラシミヅ 平清水 本願寺宣如の年不詳七月八日附の消息に、『加州石河郡西川谷之內タツミ村平清水村水淵村講衆中』と宛所したのがある。西川谷は犀川谷であるが、そこに平清水といふ部落はない。恐らくは平澤（大平澤・小平澤）の誤であらう。

ヒラシモ 平下 河北郡湯涌郷に屬する部落。

ヒラシモジョウ 平下城 河北郡平下に在つた。寶曆の調書に、此の村領に古城跡があり、畑左衛門がこれに據つたと記する。

ヒラタイ 平体 ヘラタイ 鳳至郡宇出津山分の內の小字。

ヒラタサブロザエモン 平田三郎左衛門 初めて前田利常に仕へ、祿加增とも三百五十石に至り、寛永十一年歿。子孫相繼いで藩に仕へる。

ヒラタジザエモン 平田治左衛門 寛永二十年前田利常に仕へて御射手となり、二百石を領した。子孫藩に世襲する。

ヒラタダイジョウ 平田大匠 本名は中原職俊。地下の官人で京都に居り、延寶九年前田綱紀に祿せられて二百俵を受け、命によつて職原家傳秘傳十三卷・東山天皇御卽位式起し給等を撰じた。正德元年歿。

ヒラタダエモン 比良唯右衛門 初名左內。前田綱紀に仕へ、延寶五年三月三十人頭を命ぜられ、五十石を加增して百五十石に至つた。元祿十一年歿。子孫藩に世襲する。

ヒラタタクミ 平田內匠 初名中次郎。本名中原職資。大匠職俊の子。元祿十四年二十人扶持を受け、正德二年父の遺知二百俵を襲いだ。在京地下の官人で、續紹運錄・諸家官位次第・大內裡圖等の著がある。三代內匠嗣いで二百俵を領し、四代內匠は寶曆三年召出されたが、幼少にして十五人扶持を受け、明和二年十七歳の時前祿に復し、その子八百吉天明八年襲いだ。藩末の頃にも內匠といふものがあり、尙禁裏の重大事を報告するを職として同祿を食み、平士並の待遇であつた。

ヒラダニ 平谷 能美郡谷の內の小字。

ヒラダニグチ 平谷口 能美郡新保の內の小字。

ヒラタミョウジン 平田明神 →ヒロタシヤ 廣田社。

ヒラデヒデヨシ 平手秀吉 通稱忠左衛門。織田信長に仕へた平手政秀の子で、加賀に來り横山長知に仕へ、祿三百石を受け、元和元年大坂夏陣に負傷し、敵を突倒したが首級を獲なかつた。

ヒラトコ 平床 江沼郡敷地の內の小字。大正九年四月獨立の部落となる。

ヒラトコ 平床 羽咋郡押水北庄に屬する部落。

ヒラトコ 平床 ヘラトコ 鳳至郡久田の內の小字。

ヒラトコ 平床 珠洲郡川尻の內の小字。

ヒラドコガハ 平床川 珠洲郡飯塚領山から流出し、蛸島領で海に入る。流程六粁五許。

ヒラトヲムラ 平十村 →トヲムラ 十村。

ヒラノ 平野 河北郡種の內の小字。

ヒラノ 平野 鳳至郡南北郷に屬する部落。村內の路傍に坂東塚といふのがある。天正中小伊勢村の坂東八郎左衛門が長氏を援け、越後勢と戰うて死んだ墳であるといふ。

ヒラノアリヨシ 平野有良 通稱九左衛門・是平。安左衛門在昌の子。祿百五十石。江戸御廣式御用人を勤め、享和元年四月十日その地で自殺。子是平信久文化五年祖父の遺跡として九十石を襲いだ。

ヒラノイツキ 平野齋宮 →フワイツキ 不破齋宮。

ヒラノゴザエモン 平野五左衛門 大坂冬陣の役十二月四日富田重政の屬將小幡景憲は、才伊豆の傷つけるを負ひ、平野彌次右衛門を殿として退却した。彌次右衛門の僕五左衛門、矢石の中に立ちて主を護り、十八創を得るも尙自若として居たから、城兵その名を問ふ者があつた。五左衛門曰く、我は平野氏の賤奴であるが、今や我が主己の勇武を賞し、授くるに姓氏を以てした。故に平野五左衛門といふべきであると。卽ち傲然歩を移して還つた。

ヒラノジンエモン 平野甚右衛門 美濃の浪士。金澤御坊に寄宿して居たが、天正八年佐久間盛政の攻擊を受けた時、坂中にて數度奮戰して討死した。因つてその地を甚右衛門坂といふと傳へる。この甚右衛門坂に就いては異說もあるが、不破彦三直光に仕へた不破齋宮が、平野甚右衛門の弟であるといふから、